

富士吉田あれこれ

別帳場の葬式

吉田および南都留郡の地域に残されている特徴的ともいえる葬儀の習俗について紹介します。昨今では自宅での葬儀は諸々の事情により少なくなってきました。かわりに斎場やセレモニーホールといった式場で執り行われる「会場葬」が一般的となっています。自宅葬では近隣の組の人による手伝いが必要不可欠でしたが、式場利用の場合は、葬儀の取組み、執行、そのほとんどが「おまかせ」でできるため、遺族や近所の人的負担もかなり軽減されています。ただし、香典を受ける帳場に關しては、組の人が手伝いをする慣習が現在でも続いています。

葬儀の手法については、全国各地その地域において特徴があるので、これが一般的であるとは言いがたいものがあります。大抵の場合、弔問に訪れる人は、香典である現金を「御霊前」などの不祝儀袋に入れて持ち寄ることが現在の一般的な礼儀となっていますが、このお香典、もともとは葬儀の際に笑くお香代としてお金を包むようになったものといわれており、それ以前は親類などの「モノ」を持ち寄ったといわれています。そして現在のように不祝儀袋として形式が整ったのは比較的新しいこと

で、それ以前は半紙や奉書紙にお金を包んだものでした。

この地域では「不祝儀袋」いわゆる「香典袋」を使用しないのが通常の形式となっています。この簡略化された袋不使用のシステムは喪主の立場から起因するものと考えられます。それというのも、この地域では喪主が人とは限らず、例えば故人の家督を継いだ者(おおむね長男)が施主となりますが、葬儀において全責任を負うことはありません。二男三男である分家や婿養子、他家に嫁いだ娘なども喪主として名を連ね帳場を出します。そのため香典を受け付ける帳場も故人の繋がり以外に喪主連の関係する帳場がそれぞれ立つこととなります。これを「別帳場」と呼びます。このような方式で香典を貰い受けることを「帳面出し」といいます。また、香典を出すことを「張る」といいます。大抵の場合、喪主たちに繋がりがあればそれぞれ香典を張ることとなり、その受け渡しにおいて袋があると非常に困難になり、また香典を張る方もそれぞれ袋を用意しなければならないのです。そのため、香典のやり取りは「現金」で行われ、香典袋を使用しないのが現在でも一般的となっています。別

帳場の習俗はこの地域のみではなく福島県南部から関東中部地方にみられますが、吉田をはじめこの地域には今も色濃く残っています。また山梨県内では、その内容が吉田と異なりますが、北日摩郡で「ツケミヤ」、「ツケシギ」と呼ばれる別帳場の形態があります。

帳場には住所、氏名、所属(関係)金額を記入する伝票(用紙)が設置されています。弔問に訪れた人は、まずこの伝票に記入しそれを持って受付(帳場)に行き、財布からおもむろに現金を取り出し受付に渡すのです。記入の際に喪主それぞれに「付き合いい・義理(関係)」がある場合、例えば1万円を出して「Aさんに3千円、弟のBさんとCさんに2千円ずつ」といった具合にそれぞれ3枚の伝票に記入して提出し、最終的には「おつり」を貰います。他所から訪れた人は、そのシステムがわからず、戸惑っている様子を目にすることが多々あります。一見すると現金が飛び交い、しめやかな場に見えてみえますがこの別帳場は細かくに香典が張られることから、袋を用いないで香典を張る習俗は、別帳場を合理的に運営するために生まれたものと考えられま



さだまさる

しょう。さて、この別帳場というシステムを考えると葬儀における「人付き合い」は、故人に対してよりも、残された遺族(喪主等)や家に対する義理であり、現世の付き合いを重視していることがわかります。よって故人への直接の「義理」は、その場によって関係が絶たれてしまう場合「捨て義理」として香典を張らない場合もあります。この「義理」は「張られた張り返す」という慣習があり、義理行為が往復しないことと完結しないのです。これを怠り、義理を返し忘れた場合、「義理を欠く」行為となります。場合によっては催促したりされたりすることがあるようです。これらの義理行為は冠婚葬祭すべてに当てはまる慣習といえ、冠婚葬祭それぞれに個別の「義理」が派生します。そのため「吉田の義理関係」ともいわれることが多々あります。人と人の繋がりを何より大事にする結果生まれてきた慣習ともいえ、この地域の人々の気質によるものかもしれません。(布施光敏)

参考文献
 『日本民俗大辞典』
 2000 吉田弘文堂
 『富士吉田市歴史民俗館第1巻』
 1996 富士吉田市

はじめに

上吉田地区は、富士吉田市の南側に位置し、東は忍野村・山中湖村と接し、西は松山地区、南は新屋地区、北は下吉田地区と接しています。中心部の海拔は750～850mほどで、地区の中央を国道139号線(富士みち)が南北に通っています。上吉田地区は、明治8年(1875)に

松山村・新屋村と合併して福地村となり、昭和22年(1947)には、富士上吉田町と改称して町制を施行しました。そして、昭和26年には明見町・下吉田町の2町と合併して富士吉田市となり現在に至っています。

上吉田の町は古くから富士山の北口(吉田口)の登山基地として大勢の道者(1)を迎え入れるため

に多くの「御師(2)」が集住していました。最盛期には86軒の御師が活動していたとされ、「御師の町」ともいわれていました。上吉田の町並みは、現在でもかつての地割りや一部の御師住宅が残っており、昔の面影が残されています。ここでは、登山基地、御師の町として栄えた上吉田地区の史跡と文化財を紹介いたします。

1 信仰のために富士山へ登る人。
2 御師は富士山の神霊と道者との仲立ちをし、加持祈祷をしたり、札を配ったり、登拝の際には私邸を宿泊所として提供したりしました。宿泊や登山の世話をすると同時に富士山の信仰を広める役割をはたしました。

吉田宿

現在上吉田地区の中心となっている国道139号線沿い区域は、元龜3年(1572)に集落・寺をあげて移転したもので、旧集落は地蔵寺

の東側、現在の字古吉田・字上古吉田の境の道に沿って東西に広がっていました。(の範囲)室町時代の末に記された『勝山記(妙法寺記)』の天文23年(1554)の条に、吉田は「千軒ノ在所」と

あり、移転以前からすでに御師を中心とした町場が形成されていたことがわかります。しかし旧地は雪代(富士山の融雪による土石流)の被害を避けるため集落を現在の場所へ移転したといわれています。

移転に際しては、綿密な町割りや屋敷割りが行われ、宿の南に上行寺、東に西念寺・吉祥寺・根神社・地蔵寺、西に祥春庵などの寺社が計画的に配置されました。また、宿は道を挟んで短冊状に地割りされ、道より東側の東町には31軒、西側の西町には39軒の合計70軒に御師や神職・商人・職人などが住み、富士山への登拝拠点としての町場が再形成されました。

上吉田村は、富士山へ登拝する道者が宿泊する御師の宿坊が建ち

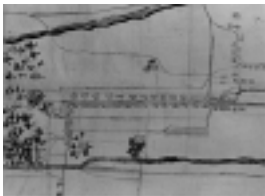
並ぶ宿場町として成立したことから、市域の他村のような農業を中心とした自給自足的な農村ではなく、農業よりも商業を中心として発展しました。

文化11年(1814)に甲斐国(山梨県)の地誌として編纂された『甲斐国志』には、「下吉田ト同村ニテ御師町ヲ以テ上吉田トシ百姓町ヲ以テ下吉田トス」とあり、もともと一つであった上吉田と下吉田が「御師」と「百姓」という生業の違いから2つの村に分かれたことが記されています。

このような理由から上吉田村は富士信仰を支える御師に対する依存度が高く、政治的・経済的にも御師が支配するという特徴をもった村でもありました。



上吉田区域図



上吉田村絵図

かなどりの 金鳥居

元龜3年(1572)吉田から移転した当時の吉田宿の範囲は、現在の上宿・中宿まで、現在の金鳥居の立つ下宿は、慶長11年(1606)に屋敷割りがされて新町として加えられました。この新町の成立によって御師町としての上吉田地区が完成し、金鳥居はその入口に建立されました。

金鳥居はじめて建てられたのは天明8年(1788)のことで、その後も倒壊などにより数度再建されたことが江戸時代の記録から見るができます。現在の金鳥居も、昭和19年(1944)に第二次世界大戦に供出されたものを昭和31年に再建したものです。

もともと鳥居は俗世界と信仰世界との間に立つもので、金鳥居から先の上吉田地区は富士山の信仰世界として考えられていました。



明治時代後期の金鳥居

明治時代には、金鳥居が吉田口(北口)登山道の起点とされ、鳥居の足元には山頂までの里程標が立っていました。

金鳥居に張られている大注連縄は長さ9畝、重さ100~170kgという巨大なもので、北口浅間神社が5年に一度、5月1日に張りかえています。



現在の金鳥居

やまもとにう 富士山元講(御法会身祿講)

富士山の麓では、富士講そのものは展開が少なく、上吉田には御法会講という富士講が活動していました。この御法会講には「村上講」と「身祿講」の2つの講が上吉田の上宿と中宿にそれぞれあり、計4つの講が活動していました。これらの講の中心となる講員は、山小屋の所有者や強力など富士山に関わる職業の人たちであり、御師との結びつきも特に強いものでした。

中宿の御法会身祿講は、富士山元講とも呼ばれます。江戸時代末期に御師「玉の坊」の檀家であった館林(現群馬県館林市)の講社の先達が、玉の坊の番頭だった渡



身祿堂

辺茂兵衛に食行身祿直筆の御伝を渡したことから、茂兵衛を先達として身祿講を始めたといえます。

講では1月3日に「お境参り」と呼ばれる祈禱を富士山の一目付近で行い、また1月26日には「身祿堂」でお焚上げを行ってその年の吉凶を占います。

なつこうじ 上行寺

上行寺は日蓮宗身延派の寺院で、常行寺とも記されています。文永6年(1269)に日蓮が富士山の五合五勺の経ヶ岳で百日間籠り、そこに法華経を埋納したとされますが、その際に日蓮は御師「塩谷」を宿坊としていました。上行寺の地は、塩谷の内庵だった所だといわれ、日蓮聖人が開いた草庵だったともいいます。その後、観応2年(1351)に日仙が中興開山して上行寺としました。

『勝山記(妙法寺記)』の明応8年(1499)の条に「吉田上行寺上へ引

ふじさんおし 富士山御師

「御師」という言葉を辞書で調べてみると「特定の社寺に所属し、参詣者をその社寺に案内して祈禱・宿泊などの便宜を図る宗教者」(『神道事典』より)とあります。この「御師」という言葉は、もともと「御導師」を略したものとされ、神社で祈禱を行う下級神職も御師と呼ばれました。

吉田の御師は、富士山そのものを本尊として信仰するため「富士山御師」などとも呼ばれ、特定の社寺に属したものではありませんでした。また、単に参詣者の案内や宿泊などの世話をするのではなく、祈禱によって寺院や神社に参詣する人々と富士山の神仏との仲立ちをする宗教者のことも意味していました。

ルへ也」とあり、この年に上行寺は現在の場所へと移転したと考えられます。

寺所蔵の銅造如来形立像は、8世紀頃朝鮮の新羅で作られたものが渡来し、後に日勝聖人の手で富士山にもたらされ、上行寺に納められたといえます。この仏像は県指定の文化財となっています。



上行寺

やまのみしや

山神社(上宿)

祭神は大山祇命。ここでは木彫りの大天狗の面を御神体として祀っています。本来山神社は、山仕事に従事している人が中心となって信仰する神社ですが、上宿の山神社は地区の鎮守となっていることから、1月17日と10月17日の例大祭には上宿の人々によって祭りが行われます。

神社の神主は御師「岡屋」が勤め、例大祭の日には祝詞をあげてお礼を出します。また、祭礼の朝には「アクマツパライ(悪魔払い)」と呼ばれる弓射りが行われます。かつては前日の16日の晩に、17~18歳までの男子が神社の前の小屋でお籠もりをし、夜通し太鼓をたたいて騒いでいたといわれています。



山神社



諏訪神社

すゝおじんじや 諏訪神社

祭神は、建御名方神。現在は北口本宮富士浅間神社の摂社となっていますが、『甲斐国志』に「本村土神ナリ」とあり、また慶応4年(1868)にまとめられた『甲斐国社記・寺記』には「諏訪明神之儀八当村開闢之旧社仁御座候故二建立之年月徳仁相知礼不申候」とあり、もともと上吉田村の産土神で、浅間神社が建立される以前から諏訪森に祀られていました。

しかし、富士山信仰の隆盛によって浅間神社の社域が拡大し、村氏神であった諏訪神社を取り込んでいきました。そして明治時代以降、浅間神社の宮司が諏訪神社の神主を兼ねるようになると、浅間神社が村氏神となり、諏訪神社はその境内社となりました。

現在8月26日・27日に行われる「吉田の火祭」も古くは諏訪明神の祭礼であり、江戸時代には7月21日・22日(旧暦)に行われていました。

きたぐちぼんぐうふじあざんじんじや 北口本宮富士浅間神社

祭神は、木花開耶姫命・天津彦彦火瓊瓊杵命・大山祇命。浅間神社の社記によると、神社は富士山の遙拝所であった大塚山に祀られていた浅間明神を起源とし、延暦7年(788)に甲斐守紀豊庭が現在の場所(諏訪森)に遷座したと伝えられます。

浅間神社は、武田信玄をはじめ領主からの崇敬も厚く、現存する最古の社殿である東宮は、永禄4年(1561)に武田信玄が寄進したものです。ついで文禄3年(1594)には郡内領主浅野氏重が西宮を寄

進、そして元和元年(1615)には、領主となった鳥居成次が現在の社殿を寄進しました。また、享保18年(1733)には富士行者の村上光清や同行の人々の寄進によって境内の建造物群の修復工事が行われ、現在にみる境内の景観が形成されました。

浅間神社の例大祭は5月5日の初申祭で、かつて諏訪神社の例大祭であった火祭は、現在8月26日・27日に鎮火祭、浅間神社と諏訪神社の両社の秋祭りとして行われています。



浅間神社拝殿

上吉田の町並みを歩く



大塚山

あつかやま 大塚山

浅間神社の西側にある登山門から400mほどの南に行った所に小高い丘があり、ここを大塚と呼んでいます。かつて景行天皇の命で東征した日本武尊が富士山麓を通ったおりにここへ立ち寄り、富士山を遙拝して戦勝を祈願したと伝えられているところです。この大塚山には日本武尊を祀る小祠があります。

『甲斐国志』には「是レ古へ社殿ナキ以前富士浅間遙拝ノ地ニ築ク、後神祠ヲ創造シ小室浅間明神

ヲ勧請スト云」とあり、富士山の遙拝所であった大塚山に浅間明神が祀られ、後に諏訪神社の境内（現在浅間神社境内）に移されたと伝えられています。

大塚山には由来を記した石碑があり、その文は西念寺の住職をつとめた国学者の春登上人が書いたものです。

ふじのくに 扶桑教

扶桑教は、明治時代初期に穴野半が創立した宗派神道の一つで、富士講の開祖である長谷川角行の教義を基盤とした神道の教団として成立しました。

穴野半は薩摩出身の郷土で、幕末に平田派の国学を学び、明治5年(1872)に教部省に出仕しましたが、翌年には官を辞して富士山

本宮浅間大社(静岡県富士宮市)の初代宮司に就任しました。そして、宮司に就任すると「富士一山教会」を結成し、明治9年には教会を「扶桑教会」と改称しました。

富士山の七合五勺にある烏帽子岩に隣接して建つ元祖室は、もとは扶桑教会の所有の山小屋で、小屋の中には扶桑教の天拝所神殿があり、扶桑教神宝の神鏡が祀られています。

さいねんじ 西念寺

西念寺は時宗の寺院で「富士道場」とも称していました。本尊は阿彌陀如来。西念寺の寺記によると、養老3年(719)行基によって開かれ、富士山来迎阿彌陀三尊が安置されたことから創建されたと伝えられます。永仁6年(1298)に遊行二世他阿真教がこの地を訪れた際、逗留して寺の宗派を天台宗から時宗へと改め、その弟子が住持して開山となりました。

また、永仁年中に武田氏の一族、一条右衛門大夫吉種という人の本願によって諸堂が再建されたことから吉種山と号したといわれます。

天文2年(1533)に西念寺は火災で焼失しましたが、武田氏・小山田氏の保護で再建されました。また、西念寺は富士参詣の道者の信仰対象に

なっていたことから、天文23年には武田晴信(信玄)によって寺の造営のために道者一人4錢の勧進を命じられました。

そして、元龜3年(1572)西念寺は他の民戸とともに宇古吉田から現在の場所へと移転し現在に至っています。西念寺の檀家は上吉田・下吉田にあって、江戸時代までは御師の多くはこの西念寺の檀家となっていました。

寺が所蔵する木造釈迦如来立像は、鎌倉期の作で県指定の文化財となっています。



扶桑教会



西念寺本堂

きしやうじ
吉祥寺

吉祥寺は臨済宗妙心寺派の寺院で下吉田にある月江寺の末寺です。本尊は十一面観音。『甲斐国社記・寺記』に「一、開山 三百八拾年文明十八丙午年創建開山雪峰和尚」とあり、文明18年(1486)に



吉祥寺本堂

じざうじ
地藏寺

地藏寺は臨済宗妙心寺派の寺院で下吉田にある月江寺の末寺です。本尊は地藏菩薩。天正5年(1577)に雪峰和尚が開基したとされます。

『甲斐国社記・寺記』に「寺内除地五百七拾六坪 但シ諏訪明神領之内也」とあり、地藏寺は諏訪明神(現諏訪神社)の領地に建立されたことがわかります。

雪峰和尚が開基したとされます。

もとは月江寺の末僧が住職となり、地藏寺が兼帯したこともありましたが、昭和10年(1935)に中興されました。また、平成15年末から老朽化のため本堂の建て替えが行われ、平成16年5月に完成しています。

ねのみしや
根神社

祭神は^{大己貴命}大国主命。祭礼は9月29日。『甲斐国志』に「根神明神 同村見捨地ナリ 祭礼八九月廿九日末社 八百万神・稲荷 是レ元亀三壬申年一村古吉田ヨリ遷地ノ時元年二先ツ此ノ神祠ヲ創造シテ祭ル所ナリトゾ 宮主同上(佐藤上総)」とあり、根の神社は、元亀3年(1572)に集落を挙げて旧地の古吉田から上吉田へと移転をする際

に、地の神を鎮めるため一番先に祀られたと伝えられています。

江戸時代中期には諏訪神社の宮司であった御師「玉屋」が管理していましたが、現在は御師石垣幣司屋が宮司を勤めています。

また根の神社は、もともと周辺の20戸ほどで祀っていましたが、昭和48年(1973)に社祠を新しくするため中宿から寄付を募り、それ以降は中宿全体で祀るようになりました。



根神社



地藏寺

上吉田の町並みを歩く

しょうしゅんあん 祥春庵

祥春庵は応永年間(1394~1428)に吉田において初めて開基した寺庵といわれています。『甲斐国志』によると、江戸時代には祥春庵の僧が富士山御師を兼ね、6・7月には道者を宿泊させ、7・8月には帯刀して神職とともに諸国へ檀家回りをを行い、配札したとされています。

明治初年に廃寺となり、現在では「ヒョウシンナ」と呼ばれる墓地となっています。



祥春庵跡

やまのかみし 山神社(中宿)

祭神は大山祇命。神社の創建は元禄12年(1699)と伝えられ、中宿の山小屋所有者や林業関係者など山仕事している12戸が山神講をつくり祀っています。

例大祭は1月17日で、御師「上文中」が神主を勤めています。例大

祭の朝には、小さな弓を作って参拝し、「テンジョウヤックリ、コウヤックリ、アクマノゲドウハラッテコウ」と唱えて矢を射り、古くから中宿に住む家には神札を配ります。



山神社

ぜんどうじ 善導寺

善導寺は浄土宗の寺院で都留市上谷にある長安寺の末寺です。本尊は聖観音。寺記によると、源頼朝が富士の参拝をした際に誤って矢に当たって死んだ兵士を埋葬した場所に堂を建てたのが始まりといえます。その後、大松山照光院と称す天台宗の寺院となり、元亀2年(1571)に教春和尚が浄土宗に改宗して善導寺を開基しました。

善導寺は、明治19年(1886)に売却されて無住となりましたが、昭和9年(1934)に長安寺住職が本堂を再建して阿彌陀仏を本尊としました。その後も長安寺が寺を兼帯していましたが、昭和49年に長



善導寺

安寺の住職が隠居して住持し、そのころ寄進された聖観音を本尊としています。

上吉田地区の成立過程や地域の歴史と深い関わりのある寺社や文化財を紹介しました。今回のレポートで紹介した内容は、上吉田地区の歩んだ歴史のほんの一部分に過ぎません。富士山とかかわりの深いこの地区でもありますので、またの機会に紹介していきたいと思います。

主な資料および参考文献
『富士吉田市史 民俗編第2巻』
1996 富士吉田市
『上吉田の民俗』
市史民俗調査報告書第9集
1989 富士吉田市
『山梨県の地名』
日本歴史地名大系19 平凡社 1995
『神道事典』
國學院大学日本文化研究所編
1994 弘文堂
『日本仏教語彙典』
岩本裕 著 1988 平凡社

博物館からのお知らせ

平成16年度博物館実習

8月6日(金)～14日(土)の9日間、1名の博物館実習生が学芸員資格取得のために学んでいきました。



博物館実習カリキュラム

| 日 | 項目 | 内容 |
|-----|-----------------|--------------------|
| 1日目 | オリエンテーション・館内外見学 | 諸注意等 博物館概要説明 |
| 2日目 | 博物館講座(体験学習)について | 施設運営・財務 講座説明・準備 |
| 3日目 | 博物館講座実施 | 土鈴作り教室 |
| 4日目 | 収蔵資料管理 | 収蔵書籍の整理 |
| | 受付/レファレンス | 受付業務/観覧者対応 |
| 5日目 | 資料の扱い方Ⅰ | 民俗資料の実測・写真撮影 |
| 6日目 | 資料の扱い方Ⅱ | 資料の受入・収蔵 |
| 7日目 | 資料の扱い方Ⅲ | 考古資料の取扱い |
| 8日目 | 実習総括 | |

刊行図書

企画展図録「国絵図・郡絵図・村絵図 富士嶽との交流」

絵図はわが国の地図の出発点であると考えられます。絵図は現在の地図のように実測性よりも絵画に近いものといえますが、その描写には生活感覚に密着して表現されています。この図録では、絵図の特性に着目し、江戸時代に降に描かれた絵図をもとにそこに描かれた当時の地域や村、背後にそびえる富士山を含めた景観を再確認し、絵図を通して富士山に対する認識、山麓地域の変化や発展の歴史を解説しています。



平成16年8月発行
A4版63頁 販売価格1,000円

臨時休館のお知らせ

年未年始・煙蒸作業

平成16年12月28日(火)～平成17年1月11日(火)

年未年始に引き続き、館内煙蒸および清掃作業のため休館となります。

1月4日(火)～7日(金)の期間、博物館及び歴史文化課の事務は教育委員会が取り扱います。

〒403-8601 富士吉田市下吉田1904 教育委員会建物3F
TEL 0555-22-1111(代)

MARUBI 編集後記

今回の「富士吉田あれこれ」では、「葬」について触れてみました。巻頭ということもあるので写真を前面に使ってきましたが、今回に限ってはなかなか写真を選べませんでした。というよりも写真がありませんでした。以前から葬儀をネタに紹介したいと考えていて、撮影の機会を窺っていたのですが、気の小さい私にとって他所さまの葬儀の撮影やその使用のお願いがどうしてもできそうにありま

せんでした。上司の葬儀の際もカメラを忍ばせて行ったのですが、何故か帳簿の取り扱いをすることになってしまい、絶好の機会を逸してしまいました。

そのような理由により、何か使える材料はないかと考え、マンガを用意してみました。巻頭にマンガを持っていくことについて職場内では不安の声が上がりましたが、うまく取ったのではないかと勝手に思っています。(FU)

富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間 / 午前9:30～午後5:00(午後4:30迄入館可)

休館日 / 火曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(日曜

・祝日を除く)、12月28日～翌1月3日

観覧料 / 大人 300円(団体 240円) 団体割引は

小中高生 150円(団体 120円) 20名以上に適用

交通案内 / 中央自動車道河口湖ICより車で10分
東富士五湖道路山中湖ICより車で10分
富士急行線富士吉田駅より山中湖方面
バス15分、サンパークふじ下車



タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出した溶岩台地帯を指すこの地方のことば「丸尾」からともったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとわれています。